
 書 評

 Matthias Baltes : *Die Weltentstehung des platonischen Timaios nach den antiken Interpreten*, Teil II, Proklos

Philosophia Antiqua, Volume XXXV

Leiden, E. J. Brill, 1978, x+175S.

矢 内 光 一

本書はプラトン（以下 Pl. と略記）の *Timaeus*（以下 *Tim.*）の世界生成の問題に関する古代の解釈史・論争史の研究の第2部である。第1部ではスベウシッポス、クセノクラテス、アリストテレス以降、シュリアノス、ヒエロクレスにいたるまでの時間的解釈、非時間的解釈が検討されたが（第1部の書評、『中世思想研究』21（1979）、212—218頁を参照されたい）、第2部ではそのあとをうけてプロクロス（以下 Pr.）の解釈が取り上げられる。

Pr. が正統 Pl. 派の線に沿って時間的解釈を否定し、非時間的解釈を主張したということは、A. E. Taylor, Cornford の *Tim.* 注釈などからもよく知られており、また Pr. の解釈がみられる *In Platonis Timaeum commentaria* (ed. E. Diehl, 3voll., Leipzig, 1903—1906. 以下 *In Tim.*)には A. J. Festugière による優れた仏訳 (*Proclus, Commentaire sur le Timée*, 5voll., Paris, 1966—1968. 著者は絶えずこれを参照・批判している)もあるが、しかし Pr. の非時間的解釈そのものをテーマに据え、その実態の全面的な究明を試みた研究はこれまでになく、本書をもって嚆矢としなければならない。本書の内容・体裁を一言で表わせば、Pr. の非時間的解釈の翻訳および注解 (running commentary) である。著者は、浩瀚な *In Tim.* のなかからテーマに直接関わる箇所を逐次取り上げ、それを独訳しながら分析を加えていくという方法を採用し、これによって Pr. の解釈を洗いざらい検討し、その一般的性格、具体的内容、解釈史・論争史上に占める位置を明ら

かにしている。また Pr. には直接の形では現存しない、キリスト教徒論駁の意図をもって世界の永続性を体系的に論じた18の論証からなる作品 'Οκτωκαίδεκα επιχειρήματα περι ἀιδιότητος κόσμου κατὰ τῶν Χριστιανῶν があったが、著者はこれを Philoponus, *De aeternitate mundi contra Proclum* から (うち Philoponus に欠ける第1論証については Ishāq ibn Ḥunain のアラビア語訳から) 復元し、本論のあとにその独訳を収載するという周到かつ貴重な配慮をもおこなっている。この作品は Pr. 自身の世界永続説を伝えるものであるが、著者はそれを *In Tim.* における非時間的解釈を解明する一助ともなしている。

Pr. の解釈が、基本的には、*Tim.* の字義通りには時間的前後関係を意味する語句を存在論的上下関係を意味する表現として解釈し、諸事物を存在論的階層のなかに位置づけ、そのことによって *Tim.* の世界生成が時間的ではなく非時間的に解されなければならないということを論証しようとするものであることは一般によく知られていると言ってよい。しかし本書は Pr. の解釈が従来知られてきたものよりもはるかに複雑で多岐にわたっていることを明らかにしている。その具体的内容は要約を容易に許すようなものではないが、著者自身がそれを試みており (Vgl. S. 131f.), ここではそれに多少手を加えながらごく大まかな輪郭を紹介するにとどめる。

Pr. にも古アカデメイア以来の伝統的な方法論的解釈 (*διδασκαλίας χάριν*) がみられ、この解釈も重要な役割を果していることが知られる (特にティマイオス・ロクロスを引証している箇所 *In Tim.*, II, 101, 11f. (*λόγῳ γενέσθαι*) を参照。Vgl. S. 100ff.)。しかしこの解釈だけでは Pl. の説の実質的内容が明らかにされないため、Pr. は一方で世界のあり方、他方において神、原因のあり方の論定をおこない、またそれと同時に、それらの相互の関連づけに腐心しながら次のような解釈をおこなう。すなわち、世界は単純無部分な存在ではなく、不等な諸部分からなる合成物 (*σύνθετον*, また結合物 *σύνδετον* とも) であり、合成物の意味において生成物 (*γενητόν*) であるとされる。さらに、世界は合成の原因を自己よりも存在論的により高次なものの中にもち、外的原因に依拠して (*ἀπ' ἄλλης αἰτίας, κατ' ἄλλην αἰτίαν*) 自己の存在をえているものであるという意味において生成物であるとされる。また、原因は世界に対してつねに作用し、それに応じて世界もつねに働

きかけられ、つねに生成しているとされる。さらに、世界は時間と同時的存在であり(Vgl. *Tim* 38C2f.), 世界内部にある大部分の、部分時間のうちにある諸事物とは異なって、時間全体にわたる永続的な(αἰδιος)のものであるとされる。しかし、このことは世界が永遠な(αἰώνιος)ものではなく、永続的なものでしかないということをも含意しており、その根拠が世界の身体(物体)性のうちに求められる。いかなる物体も自己自身を維持しえず、絶えず消滅の危機にさらされているため、すなわち、つねに再生され(ἐπισκευαστός, vgl. *Pl., Politicus*, 270A4), 連続創造(creatio continua)によって維持されなければならないが、世界も有限なものにすぎない身体をもち、永遠にあるもののように無限の永遠を一挙に受け入れることができず、永遠の放射を時間の無限の拡がりにおいてただ部分ごとに受け入れることができるだけであるとされる。しかし、世界はまったく完成されることのない生成のうちにあるのではなく、むしろつねに生成していると同時につねに完成しているものとして(ὡς αἰὲ γηγυόμενον ἄμα καὶ γεγενημένου) 解されなければならないとされ、世界のかかる永続性の究極的原因は、善なることをつねに欲し、つねに実現する神の善性のうちに求められる。以上 Pr. の解釈内容のたまかな概略であるが、実際には Pr. は *γενητόν, ἀρχή* の諸義の分析、*ἐνέργεια, οὐσία δύναμις* の各観点からの世界、靈魂、時間、天体等の分析などをまじえて解釈をおこなっており、さらには生物個体の可滅性に対する生物種の永続性の主張、*Tim.* 42A1ff. の男女の継起的生成は専ら存在論的優劣性を意味するとする解釈など論点もきわめて多岐にわたっている。

Pr. の解釈はうへの概略からも察せられるように伝統的な非時間的解釈(存在論的形而上学的解釈、自然学的解釈、方法論的解釈)をきわめて多様な仕方でも展開したものであり——ただし全体として必ずしも一箇の緊密な統一性をもつまでに高められえていない——、本書の価値がその多様性をつぶさに明らかにしている点にあることは言うまでもないが、しかしそれ以上に本書の価値は第1部と同様に Pr. の個々の議論・解釈を先行諸議論・解釈との関連において分析し、その由来および Pr. によって批判されている議論・解釈を考証し、そのことによって Pr. の解釈を解釈史・論争史上に位置づけている点にあると言わなければならない。ここでその詳細にふれることはできないが、Pr. の反論相手について言えば、それが特にア

アッティコスであったことが明らかにされている。Pr. の対決相手がプルタルコスとアッティコスであったことはよく知られており、また第1部ではアリストテレス・ペリパトス派側からの時間的解釈に立った絶えざる Pl. 説批判が論争を展開せしめた直接の動因であり、それに対して Pl. 派が一般に非時間的解釈をもって応酬し、そのことによって論争史・解釈史が形成されたことが明らかにされたが、Pr. によって批判の俎上にのせられるのは、アリストテレス・ペリパトス派というより、むしろ Pl. 派にあって時間的解釈を唱えたプルタルコス、アッティコス、なかんずく後者のアッティコスであったことが本書から知られる。アリストテレスは無論批判もされているが、プルタルコス、アッティコスに比べてむしろ敬意を表されており、その点でボルピュリオスがアリストテレスをもいまだ対決相手としていたのと趣を異にしていることが明らかにされている。ただし、Pr. はプルタルコスを自ら読んではおらず、アッティコスについても自ら読んだというよりはむしろボルピュリオスとイアンブリコスを通じて知ったと考えられ、さらにボルピュリオス自身プルタルコスはアッティコスを通じて間接的に知ったと考えられるという興味深い指摘もなされている (vgl. S. 34f., 105, Anm. 358, Teil I, S. 44, Anm. 84)。他方、Pr. が依拠した人物としては、それが特にボルピュリオスとイアンブリコス、ついでシュリアノスであることが明らかにされている。依拠した人物に関する著者の分析はきわめて詳細であり、Pr. が名前を挙げていないタウロスの影響 (その分析・見解については vgl. S. 21, 30, 130)、Pr. のボルピュリオスに対する批判および批判しながらも自説との一致をはかろうとする態度 (特に S. 54, 56, 80, Anm. 255, 89—94 を参照)、第1部で神の不変性の要請との関連でその影響が強調されたアリストテレスの *De philosophia* との関係 (vgl. S. 46ff. Pr. は *De philosophia* に由来するアポリアイを *Tim.* の世界の無始性の論証に用いているが、著者は Pr. が *De philosophia* を読んだことを疑問視し、その論証をボルピュリオスに負っているとする) など数多くの知見がえられる。第1部と相俟って Pr. の解釈を解釈史・論争史の伝統のなかに位置づけている点で本書は特に高く評価されてしかるべきである。また本書には *Tim.* 27D6—28A4 で生成物の定義がなされているとする Pr. に対する著者自身の批判 (vgl. s. 33f., 61f. またこれ以外の Pr. に対する著者の批判としては特に vgl. s. 22f., 60), *Tim.* 30A のいわゆるコスモス

生成以前の無秩序な運動に関する Pr. の二種類の説明に対する著者の分析・考証 (vgl. S. 89—94) その他見るべき所は数多い。

また著者は、Pr. が非時間的解釈を展開したさいの本来の関心、また Pr. をして非時間的解釈を展開せしめた動因、さらに Pr. がそれを主張した究極的な理由についても論定をおこなっている。すなわち、Pr. にとって第一義的な関心は、可視的世界そのものの永続性というよりもむしろ可視的世界を成立せしめている諸原因、すなわち靈魂、デミウルゴス、範型、一者の不変性にあつたとし、世界に時間的開始と終末を認めるとすれば、世界を成立せしめている諸原因も世界との間にある本質的關係からしてもはや不変ではありえず、本質的に可変なものであることになり、かかる事態を避け諸原因の不変性を維持することこそ Pr. (また新 Pl. 派一般) の本来の関心事であつたという見解を明らかにしている。また新 Pl. 派一般にとって、靈魂の不生不滅性、さらに世界内部の諸神性 (天体、時間) およびコスモス神そのものの不生不滅性を否定すれば解決不可能な困難におちいると思われたとし、それらの不生不滅性の維持が Pr. を含む新 Pl. 派をして非時間的解釈を展開せしめた動因であつたとする。著者はさらに Pr. のアッティコス論駁の背後には対キリスト教徒論駁があつたとし、神による世界の現実の創造を信じ *Genesis* 解釈の支持のために *Tim.* をこのんで引き合いに出し、またアッティコスとその *Tim.* 解釈の保証人ともしたキリスト教徒に対する批判のうちに、Pr. が *Tim.* の字義通りには時間的生成を意味する箇所を逐一非時間的に解釈し、アッティコスの時間的解釈を論駁しなければならなかつた究極的な理由を求めている。著者の以上の見解によれば *Tim.* の世界生成の問題は Pr. および新 Pl. 派にとっては第一義的には自然学的というよりは宗教的神学的形而上学的な問題であつたということになるであろう。

ところで本研究ではキリスト教作家は一般に取り上げられていないが、しかし Pr. の解釈の背後にキリスト教徒論駁をみる著者の論定から著者自身の問題意識にはまた世界の永続性の問題をめぐってキリスト教神学との対比においてギリシア哲学内部の実態を探ろうとする意図があつたとも察せられるであろう。この点に関して言えば、一般に異教古代にあつては、時間的解釈、非時間的解釈のいずれにおいても、解釈の根底には世界の無始無終・永続説があつたと言うことができるであらう。

う。すなわち、一方の時間的解釈を取り Pl. 説を批判する立場にしても、Pl. は *Tim.* で世界がかつて現実生成したと説いているが現実には世界は永続的であるという主張があり、他方の非時間的解釈を取る立場にしても、Pl. にとって世界は本来永続的であると Pl. 説の擁護をなしておりその根底にはやはり世界永続説がある。無論特にエピクロス派、ストア派を考慮すればこのような単純化には無理があることは否めないが、しかし異教古代においては世界永続説が主流を占めていると言ってよい。また著者は *Tim.* の世界生成の問題が新 Pl. 派にとっては第一義的には宗教的神学的形而上学の問題であったことを明らかにしており、そのこと自体は否めまいが、しかし、解釈史・論争史の全体を通観すれば、アリストテレスが批判の論拠として掲げた神の不変性という神学的命題と生成したものは消滅するという自然学的命題が決定的な影響を及ぼし、正統 Pl. 派はこれらの命題を受け入れるなかで非時間的解釈を展開していることが知られ、神学的問題と自然学的問題が本質的に関連し互いに相分かちがたく表裏一体をなしている点がむしろ注目されてよい。自然学的問題と神学的問題は、世界は善美な秩序を永続的に保つものであり、その秩序は善美なものをつねに実現する同一・不変・完全な神が支えているという観念によって関連づけられていると行うことができるであろう。異教古代についてこのように言いうるとすると特に興味を引かれるのはやはりアッティコス¹の位置である。神による現実の創造、神の *πρόνοια* を強調するアッティコスの解釈は宗教的神学的色彩がきわめて濃厚である。正統 Pl. 派の批判の矛先がこの「宗教的プラトニスト」(vgl. Teil I, S. 62) に向けられたということは今後検討されてよい問題を含んでいるように思われる。

しかし翻って世界永続説がギリシア哲学においてつねに一般的であったかという事態はそのように単純ではない。むしろ初期ギリシアのいわゆる *φυσικοί* の宇宙論では進化論的宇宙生成論が一般的であり、Pl. がそれに対抗してギリシア哲学史上最初に創造論的宇宙生成論を *Tim.* において展開したというのが今日の通説であると言ってよい (vgl. F. M. Cornford, *Pl.'s Cosmology*, London, 1937, S. 31, W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, I, Cambridge, 1962, S. 140ff.). 無論 *Tim.* そのものについて言えば、その叙述を字義通りに解すべきか否かの問題は現代においても解釈が大きく二説に分かれている。しかし、

Pl. を境にして異教古代で世界永続説が主流を占めるようになったとすれば、*Tim.* は歴史的には宇宙の秩序を生成論的に説明するコスモゴニアーからそれを存在論的な方向で説明するコスモロギアーへの転換をもたらしたものとしてとらえることができるであろう。*Tim.* をこのようにとらえるとき、*Tim.* 宇宙論の歴史的生成過程と展開過程の問題が生じてくるが、著者の上下2部からなる研究はこのうちの展開過程の研究に属するものとして位置づけられる。著者はあくまで現存資料に忠実にあたりながら *Tim.* の世界生成の問題に関する解釈史・論争史の実態の内在的解明に全力を傾けている。本研究はまた資料集の性格をもそなえていると言ってよく、*Tim.* 解釈史研究のみならず、広くプラトニズムの展開の研究、また *Tim.* そのものの解釈をおこなううえでも今後に資するところきわめて大であると言わなければならない。現在 Münster に勤める著者からの連絡によると第1部で予告されたプロティノスまでの包括的な *Tim.* 解釈史研究の刊行は遅れるそうであるが本研究におとらずそれが内容充実したものになることを期待してやまない。

John Hick : *Evil and the God of Love*

2nd ed. The Macmillan Press LTD

1977. pp. xiii+389

荒 井 洋 一

1 〔問題〕もし神が世界を創ったのだとすると、どうしてそこに悪は在るのかとつぶやいてみる。もし神が全善 (summum bonum) であるならば、すべての悪を取り除こうと欲するはずであり、もし神が全能 (omnipotens) であるならば、すべての悪を取り除くことができなければならないはずだ。

しかし悪は在る。

神が創った世界の中に悪は現に在るように見える。

とすると神の全善と全能の仮定のどちらかが疑われるのだろうか。